邦子 狂詩曲

Rhapsody

ラプソディー

関連企画：中村蓉と向田邦子作品を踊ってみよう

ワークショップの記録

Report 05

関連企画
中村蓉と向田邦子作品を踊ってみよう

ダンスに興味がある人、いままでとはちょっと違う視点から体を動かしてみたい人、そして文学作品が好きな人…中村蓉と向田邦子の世界に、ダンスを通して触れてみる。

『邦子狂詩曲(ラプソディー)』の公演に先駆けて、本作の振付・構成・演出を務める中村蓉と一緒に向田邦子作品を踊るワークショップが開催された。公演に向けた創作の真っ只中に行われたワークショップでは、中村が公演出演者と日々積み重ねているワークや思考をワークショップ参加者と共有する時間になった。

まずは簡単な自己紹介から。参加者ひとりひとりの人柄やワークショップ参加への想いを共有する。そして2人1組でストレッチを行い、コミュニケーションを取りながら動くための準備が進む。講師と参加者、双方の関係性だけではなく、参加者同士が程よく関われる空気感がすでにできており、ここからのワークが楽しく進むであろうということが準備の段階で感じられた。

1

2人1組から3人1組へ。グループ内でポージングを組み合わせていくように、身体でパズルをするワークを行う(写真1)。次に、全員で円になり、隣の人へポーズを渡していくリレー形式のワーク(写真2)。自分だけではなく周りとの関係性を把握し、協働のための思考を瞬時に働かせることを必要とする、忙しくも充実している時間に見えた。

2

同様のポーズを渡していくだけではなく、「この夏したいこと」という共通のお題に対して、それぞれ思い描くものを身体で表現することも行われた(写真3)。中村は、向田邦子の様々なエッセイのなかで、独特な見立てや、まるで連想ゲームのように話が連なっていく表現にたくさん出会ったと語っており、そこから着想を得たワークを参加者と味わった。

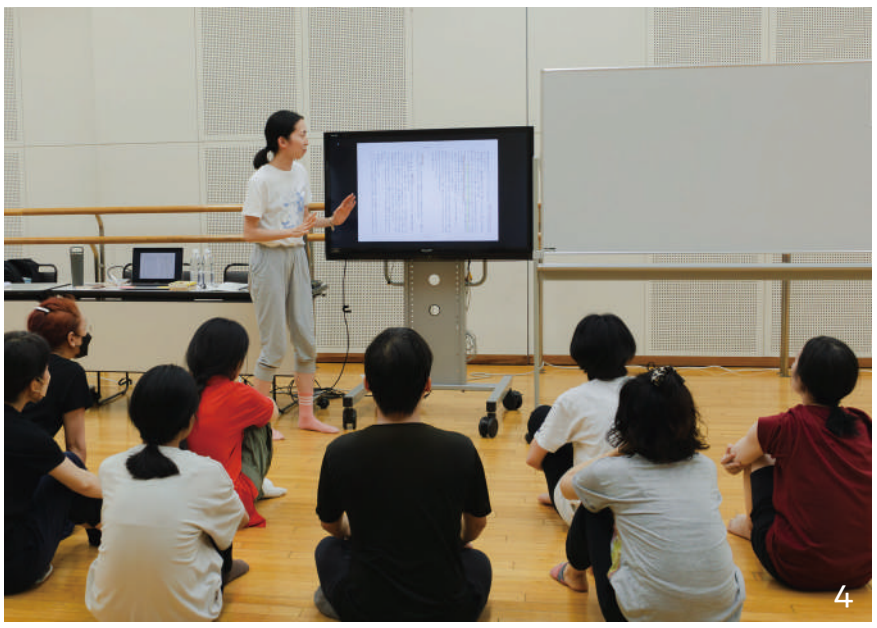
3

関連企画
中村蓉と向田邦子作品を踊ってみよう

実際にエッセイの一部を読みながら、話が連想ゲームのように繋がっていく文章を確認する(写真4)。これを身体で表現するということはどういうことなのか、先ほどから続く連想のリレーの他にも、様々なお題を元に試していく。

後半のワークは「一文を身体で表現する」ことに挑戦した。向田邦子の“男女”の捉え方に着目し、印象的なエッセイでの一文や、“男女”にまつわることわざをお題に、1人ずつ表現のアイデアを練っていく(写真5,6)。そして選んだ一文と共に1人ずつ創った振付を発表する。身体の勢いと言葉が合わさり、独特な“必殺技”と呼べるような表現がたくさん誕生した。前半で取り組んだ身体パズルや連想リレーでの瞬発力も、とても活きているように感じられた。

最後に、誕生したそれぞれの“必殺技”が、中村によってひとつの作品になるよう演出されていく(写真7)。
向田邦子の文章表現を元に、中村が種を植え、参加者自ら創り出した表現が作品になった。約90分という短い時間の中で、コツコツと理解を高め、身体は自由に動きだす。濃密な工程が積み重なる、実に豊かなワークショップであった。


4

5

6

7

レポート担当　構成：緒方彩乃　写真：アラキミユ